

令和8年度

# 作文コンクール 入賞作品集

## 建設産業で働く方の作品

未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール



未来を創造する  
建設産業

届けよう  
作文コンクール  
建設産業への熱い想い

令和8年度

応募期間  
令和8年5月11日(月)  
6月30日(火)

各賞  
国土交通大臣賞(1名程度)  
国土交通省不動産・建設経済局長賞(2名程度)  
優秀賞(5名程度)

主催/国土交通省・建設産業人材確保・育成推進協議会

## 高校生の作品

高校生の作文コンクール



高校生の  
作文コンクール  
建設産業への想い

令和8年度

応募期間  
2026  
5/11 Mon.  
6/30 Tue.  
当日消印有効

各賞  
◆ 国土交通大臣賞(1名程度)  
◆ 国土交通省不動産・建設経済局長賞(2名程度)  
◆ 優秀賞(15名程度)

主催 国土交通省・建設産業人材確保・育成推進協議会

建設産業人材確保・育成推進協議会

# 作文コンクール入賞作品集

## 選定結果

### 建設産業で働く方の作品 ..... P3

(未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール)



#### 国土交通大臣賞

山本美穂 (株)大林組 東京都 「一人で抱え込まないと決めた日」 ..... P4



#### 不動産・建設経済局長賞

長崎涼 加和太建設(株) 静岡県 「結実」 ..... P5

狩屋雅之 岡山県立岡山工業高等学校 岡山県 「2050年、社会インフラを守るのは」 ..... P6



#### 優秀賞

上村結之 瑞穂建設(株) 群馬県 「土木系女子の経験を語る」 ..... P7

圓崎南々花 長田組土木(株) 山梨県 「ハイヒールから安全靴へ」 ..... P8

鳥巢智恵美 C-Lien 石川県 「土木に泥むわたしからのラブレター」 ..... P9

原可奈子 (株)平成建設 愛知県 「父の背中を追って」 ..... P10

西野春樹 朝日土木(株) 三重県 「匂いが呼び覚ます誇り」 ..... P11

花田美香 カナツ技建工業(株) 島根県 「歴史の町並みに、未来の安心を届ける」 ..... P12

### 高校生の作品 ..... P13

(高校生の作文コンクール)



#### 国土交通大臣賞

川上小夏 長崎県立長崎工業高等学校 建築科 2年 「国境を越えて子供たちの未来を守る建築産業」... P14

茂田禪将 熊本県立翔陽高等学校 総合学科 工業系列建築 3年 「私を築く建設業」..... P15



#### 不動産・建設経済局長賞

山崎瑛子 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年 「一人ひとりの中にある建築」 ..... P16

高瀬柑南 静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科 1年 「父の仕事と私が学ぶ理由」..... P17

後藤田光 愛媛県立松山工業高等学校 土木科 3年 「重機に負けないパワフルな人」 ..... P18



#### 優秀賞

林旺佑 栃木県立宇都宮工業高等学校 建築デザイン科 2年 「未来への道のり」 ..... P19

西山椰々 長野県長野工業高等学校 建築学科 1年 「描くことと造ること」 ..... P20

大谷晃史 富山県立高岡工芸高等学校 建築科 2年 「「当たり前」のために」 ..... P21

竹澤華那 石川県立羽咋工業高等学校 建設・デザイン科 3年 「思い出を守り、未来を築く建築」 ..... P22

川邊恵佑 岐阜県立中津川工業高等学校 建設工学科群 1年 「私が建設にはまった瞬間」 ..... P23

小関悠真 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年 「五十のダムの裏に見えたもの」 ..... P24

齋藤光志 静岡県立浜松工業高等学校 建築科 2年 「ペン先にかかる重み」 ..... P25

佐々木優吏 静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年 「兄の背中が教えてくれた木の呼吸」 ..... P26

野口向葵 長崎県立長崎工業高等学校 建築科 3年 「未来へ脈打つ建築」 ..... P27

平川煌基 熊本県立熊本工業高等学校 建築科 2年 「建設業界を担う一人になるために」 ..... P28

小田原綾音 鹿児島県立鹿屋農業高等学校 農林環境科 3年 「社会の役に立ちたい」 ..... P29

# 選考講評

## 建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員長 浦江真人

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会は、今年度も、建設産業で働く社会人を対象とした＜令和8年度 私たちの主張＞と高校生を対象とした＜令和8年度 高校生の作文コンクール＞を実施しました。応募期間は、いずれも、令和8年5月11日(月)から6月30日(火)まででした。

＜私たちの主張＞には509件の応募があり、＜高校生の作文コンクール＞には881件の応募がありました。このように沢山の方々から建設産業に対する熱い思いを文字にして応募してくださり感謝いたします。

応募作品の中から選考委員会によって、国土交通大臣賞、国土交通省不動産・建設経済局長賞、優秀賞を選考しました。国土交通大臣賞を受賞した方には、国土交通省にて表彰式が行われ、優秀施工者国土交通大臣顕彰式典にも参加いただきます。また、その他の入賞者については、地方整備局等において表彰を行います。入賞作品は、国土交通省HP、(一財)建設業振興基金HPや機関誌、新聞等に掲載されます。

社会人向けの＜私たちの主張＞では、建設産業で働く皆さんの建設産業への熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々へ建設産業の役割と重要性について理解と関心を高めていただけるテーマで作品を募集しました。今年度は、次のテーマで作品を募集しました。

### ① 建設産業という仕事への想い

#### ② みんなの暮らしを支え続ける建設産業

①のテーマは、これまでは「未来」「夢」など、やや抽象的なテーマで募集してきましたが、概念的な内容に偏る傾向も見られました。そこで今回は、建設産業に従事する一人ひとりが、日々どのような思いで仕事に向き合っているのかを率直に綴ってもらうことを目的としました。職種を限定せず、現場技術者・技能者のみならず、設計、営業、事務、維持管理など、さまざまな立場からの視点で「仕事(産業)への想い」を言語化してもらうことで、建設産業のリアルな姿や働く人の誇り、やりがい、責任感を広く社会に伝えてもらいたいと考えました。

②のテーマは、学校や道路、橋、公園、上下水道など、日常のあらゆる場面は建設産業によって成り立っています。インフラ整備や維持管理、災害対応など、「当たり前を支え続ける役割と責任」「続けることの重要性」といった、現場を知る社会人の視点から改めて言語化してもらうことを目的としました。

建設産業の人材不足は社会基盤の弱体化に直結する問題です。本テーマを通じて、社会基盤の維持について考えるきっかけを創出したいと考えました。今年度は、509作品の応募がありました。応募数は、都道府県別では宮城県が42.2%と最も多く、次いで新潟県が12.6%でした。男女別では、男性78.4%、女性21.6%でした。職種別では、施工管理が76.0%、事務が10.6%でした。年齢構成では、20歳代が59.7%で最も高く、次いで30歳代16.7%となっています。経験年数では、3～5年が29.7%で最も多く、6～10年が21.8%、2年以下が21.2%でした。

国土交通大臣賞には、山本美穂さん((株)大林組)「一人を抱え込まないと決めた日」が選ばれました。結婚・子育てを経て現場勤務に戻った際の息子さんとの切ないやりとりと仕事の楽しさとの間の葛藤から、それを通じて学んだチームとしての仕事の進め方、責任感、家族の在り方など分かりやすく説得力を持って

文章にされていて建設業の仕事とは何かを考える上でもとても啓発されるものです。

＜高校生の作文コンクール＞は、高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象とし、高校生の皆さんに建設産業への関心を抱いていただき、建設産業の仕事をより身近なものに感じ、入職の検討の機会とするために、建設産業にまつわる内容で作品を募集しました。今年度は、次のテーマで作品を募集しました。

### ① 私たちの暮らしを支える建設産業の仕事

#### ② 学びの中から見えてきた建設産業のかたち

①のテーマは、学校や道路、橋、公園など、建設産業は日常生活のあらゆる場面で私たちの暮らしを支えています。身近な建設産業の仕事や地域での出来事に目を向け、高校生自身が感じたことや考えたことを言葉にしてもらうことをねらいとしました。建設産業を通じて社会とのつながりや仕事の意義について理解を深めるとともに、自分たちの生活と建設産業との関係に気づく機会としたいと考えました。

②のテーマは、高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒が、日々取り組んでいる授業や実習などの「学び」を振り返り、その中から仕事や社会とのつながりに気づいてもらうことを目的としました。社会人経験がない段階で建設産業の魅力や未来像を抽象的に描くのではなく、今学んでいる内容や学校生活の中で感じたことを素直に綴ってもらうことで、より具体性のある作品が集まることを期待しました。また、建築学科、土木学科等で学ぶことの意義や魅力が伝わる作品を通じて、工業高校等の存在価値や教育内容の重要性を広く発信し、担い手確保の取り組みにもつなげていきたいと考えています。

今年度は、全国の39の高校から881作品の応募がありました。都道府県別では、山梨県が24.3%と最も多く、次いで長崎県が21.6%でした。男女別では、男性68.9%、女性24.9%でした。学科別では、建築系が51.2%、土木系が33.5%、建設系が14.3%となっています。学年別では、1年生23.2%、2年生38.5%、3年生38.4%でした。

国土交通大臣賞の一人目は、川上小夏さん(長崎県立長崎工業高等学校建築科2年)「国境を越えて子供たちの未来を守る建築産業」が選ばれました。1年間の建築に関する勉強で自分が成長したことへの実感と、小学校5年生の時の『マザー・テレサ』の本から「世界中の子供たちが貧困や戦争に苦しまず、安心して生活できる環境を作りたい」という強い一途な思いで大きな夢に向かっていくのが印象的です。

二人目は茂田禅将さん(熊本県立翔陽高等学校総合学科工業系列建築3年)「私を築く建設業」です。建設への淡い思いが熊本地震という実体験と顔なじみの作業員の言葉を通して、「地域の命と未来を守る」という建設業の根源的価値の気づきへと変わり、「若手就業者の減少」という厳しい現実を知ったうえで、それがかえって自らの職業使命感を強くし、矜持をもって建設業に進むという決意に大きな希望を感じると同時に、さらなる次世代の技術者の模範となつてほしいと期待を抱かせます。

受賞された皆さんの今後の活躍を期待するとともに、入賞作品を読まれた多くの人たちに建設産業の魅力や重要性を知ってもらい建設産業への入職者が増えることを期待します。

# 建設産業人材確保・育成推進協議会

## 令和8年度

### 未来を創造する建設産業

# 「私たちの主張」作文コンクール

#### ■ 趣 旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設産業で働く方々の熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々に建設産業についての理解を深め、関心を高めていただくために作文コンクール「私たちの主張」を実施しています。

今コンクールは、平成20年度から実施し、今年度で19回目となりました。

#### ■ 募集概要

- 応募資格 建設産業の仕事に従事している方
- 応募期間 令和8年5月11日(月)～6月30日(火)
- 応募テーマ 建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。  
建設産業という仕事への想い 又は みんなの暮らしを支え続ける建設産業
- 応募総数 509作品

#### ■ 作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

<https://kikan.kensetsu-kikin.or.jp/sakubun/result.html>

#### ■ 選考委員

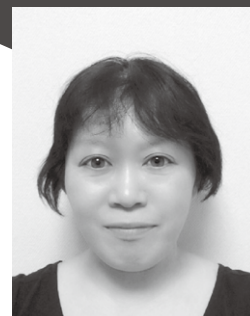
- 浦 江 真 人 東洋大学 教授  
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
- 寺 前 大 国土交通省 不動産・建設経済局 建設振興課長
- 岩 野 剛 (一社)全国建設業協会 業務執行理事
- 樋 脇 毅 (公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
- 小 島 哲 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事



## 国土交通大臣賞

# 一人で抱え込まないと 決めた日

やまもと みほ  
山本 美穂 [株式会社大林組 / 東京都]



「お母さん、僕のこと嫌いになって、お家にいないの?」

その言葉を聞いたとき、私は答えることができなかった。

二十年ほど前、息子が六歳になった頃のことだ。私は結婚・子育てを機に現場勤務から常設部門に配属になり、息子の成長とともに七年ぶりに現場勤務へ戻る希望を出した。ものづくりが好きでゼネコンに入ったからである。そんな私にとって久しぶりの現場は、土の匂いも、空の青さも、図面を手にかく時間も、胸が躍るほど楽しかった。工程を組み、協力会社の皆さんと段取りを詰め、少しずつ構造物が形になっていく手応えが、私を前に進ませていた。

ところがある時、その現場で大きな物損事故が起きた。元請社員として近隣対応に追われ、日曜も含めて出勤が続き、毎朝五時過ぎに家を出て帰宅は深夜、そんな日々が一月近く続いた。責任を果たすには「私が踏ん張るしかない」と思い込み、家のことは夫に任せきりになった。久しぶりに息子が起きている時間に帰宅した夜、彼は泣きながら冒頭の言葉を投げかけた。私は、現場での責任と母親としての役割の間で立ち尽くし、「一人息子を泣かせてまで、この仕事を続ける意味があるのだろうか」と自分を責めた。

あの頃の私は、責任感とは「一人で抱えること」だと信じていた。判断を下す立場の人間は弱音を吐いてはいけない、誰かに頼るのは甘えだ、と。けれど現場は、そもそも一人で完結する仕事ではない。測量、資材、重機、交通誘導、近隣調整。少しでも車がずれば、工程も安全も品質も崩れる。私が抱え込み、視野を狭めた瞬間に、チーム全体の動きは鈍くなる。

転機は、苦しさの只中で見えてきた。逃げずに現場と向き合い、やり切るしかない一方で、家庭を支える夫の存在がなければ私は立っていられなかった。あの経験は、責任ある立場で判断する覚悟の原点になったと、今では思っている。覚悟とは、孤独に耐えることではなく、必要なときに助けを求め、状況を共有し、最善の手を選ぶことだ。

それ以来、私は「抱えない」ことを仕事の基本動作に置くようになった。問題が起きたら、まず情報を開き、関係者を集め、選択肢を並べる。自分の中で結論を固める前に、現場の声を聞く。図面だけでは見えないリスクを想定し、事前の確認と調整を徹底する。その姿勢が、現在私を都市土木現場の所長という立場へ導いたのだと思っている。

現在、私の担当現場は、新築ビルと地下街をつなぐ地下接続工事である。供用中の道路や地下構造物、各種埋設物が密集する場所で、リスクを想定しながら工程・安全・品質を守る。協力会社二十～四十名ほどの仲間と、毎日同じ図面を囲み、「今日の最善」を積み重ねている。

そして部下にはこう伝えている。「現場監督は指揮系統上は上位でも、人間として偉いわけではない」と。職人さん、電工さん、鳶さん、大工さん、警備員さん——それぞれの立場で現場を支える人がいて、初めて現場は成り立つ。「職業に貴賤なし」という言葉を、私は現場で何度も教えられてきた。だからこそ、悩みや困難は一人で抱えず、早めに共有してほしい。共有は責任逃れではない。良い構造物をつくるための、最も誠実な手順だ。

いま所長として現場に立つ私は、若い頃の自分に言いたい。「踏ん張るのは一人じゃなくていい」。チームでつくる仕事だからこそ、チームで悩み、チームで決める。その積み重ねが、安全と品質を守り、街の足元を支える。

あの夜、息子に返せなかった言葉を、今ならこう言える気がする。嫌いになったわけじゃない。ただ、守るべきものを一人で抱えようとして、うまくできなかった。建設業の仕事は、最終的に構造物という形を残すが、その完成までには、数えきれない判断と連携が積み重なっている。誰か一人の正解ではなく、チームとして最善を選び続けた結果が、社会に残る仕事になるのだと思う。

だから私は決めた。二度と一人で抱え込まない。現場も、家族も、自分自身も守れるように、必要な人と手をつなぎながら、明日も現場に立つ。



## 不動産・建設経済局長賞

# 結実



ながさき りょう  
長崎 涼 [加和太建設株式会社 / 静岡県]

私が建設業界に飛び込んで、早いもので十年の月日が流れた。現在は地元静岡の建設会社で施工管理を担当し、公共インフラの整備に携わっている。学生時代、建設業には「きつい、汚い、危険」という3Kのイメージがつきまとっていた。入社当初はその過酷な環境に打ちのめされる日々だったが、泥と汗にまみれながらも自らを律し、黙々と現場に向き合う職人たちの背中を見るうち、私の先入観は脆くも崩れ去った。彼らは炎天下でもミリ単位の精度にこだわり、一切の妥協を許さない。今、私の胸にはこの仕事に対する静かで深い誇りが宿っている。

建設業の真の役割、それは「当たり前日常を支え続けること」である。毎日歩く道路、蛇口をひねれば安全な水が届く上水道、豪雨から街を守る堤防。インフラの多くは完成すれば土の中や川底に隠れ、人々の目からは見えなくなる。美しい外観が残る建築物とは異なり、風景に溶け込むのが土木工事の宿命だ。誰も見ていなくとも自らの良心に忠実に、一本の鉄筋、一塊のコンクリートに魂を込める。見えない部分の手抜きは、将来の災害時に人命を脅かすからだ。その目立たない「誠」の積み重ねこそが、社会の根底を支え、地域の安全を担保しているのだ。

その事実を痛感した出来事がある。数年前、記録的な大雨で沼津市と清水町を結ぶ要衝「黄瀬川大橋」が落橋した時のことだ。自社が緊急復旧の最前線に立ったが、当時、別の現場にいた私は、濁流が渦巻く現場での過酷な作業をメディア越しに見つめることしかできなかった。もどかしさを抱える一方で、画面に映る職人たちの背中からは「一日でも早く街の動脈を繋ぎ直す」という強烈な使命感が溢れていた。昼夜を問わぬ懸命な作業の末に仮橋が架かり、住民の方々が「本当に助かった」と喜ぶ姿を見た瞬間、私の胸を激しい感動が突き抜けた。建設業とは、これほどまでに人々の暮らしに直結し、絶望の中にある人に安堵と希望を手渡せる仕事なのか。「いつか自分も、地元静岡の命の基盤を直接支える誇り高き技術者になりたい」。第三者の立場でしかなかった私の中に、強固な覚悟が芽生えた瞬間だった。

数年が経った現在。私は奇しくも、あの古い黄瀬川大橋の橋台を取り壊す現場の指揮を執っている。かつて職人たちが死に物狂いで繋いだ橋から、未来の強固な橋へとバトンを渡す重要なプロセスだ。半世紀以上に渡り地

域を支えた巨大な構造物。これを解体するには、熟練の技術と細心の注意を要する。重機の轟音が響く中、時折あの日のニュース映像にあった住民の笑顔が脳裏をよぎる。今はまだ古い構造物を解体する裏方の作業かもしれない。しかし、誰も見ていないこの土中の基盤づくりに一切の妥協はしない。この手で確かな土台を築いた先に、必ず新たな黄瀬川大橋が架かり、再び地域の日常を何十年と強固に支えたと信じているからだ。あの日に抱いた至誠の念こそが、今の私を突き動かす最大の原動力である。

私たちが創り出しているのは無機質な構造物ではない。人々が安心して明日を迎えるための「命の基盤」だ。その役割をより確実なものにするため、私たちの現場もまた絶えず進化を遂げている。近年導入が進む3次元点群測量は、現場の複雑な地形を立体的に把握し、現場に潜むリスクを未然に察知することを可能にした。また、ICT建機を用いた施工管理では、省人化だけではなく3次元データと現場のわずかな誤差を即座に可視化し、緻密な軌道修正を実現する。これらの新技術は、決して単なる省力化のためのツールではない。細部にまで妥協を許さない品質へのこだわりをさらに研ぎ澄まし、現場の「誠の質」をより高みへと引き上げるための前向きな挑戦なのだ。

しかし、技術がどれほど進化し、労働環境が近代化されようとも、決して変わらないものがある。それは、より良いものを造り、人々の日常を守り抜くという私たちの「誠」の精神である。最先端のシステムも、現場で使命感に燃える技術者たちの熱い心と倫理観があつてこそ、真の力を発揮する。

「至誠、天に通ず」

私はこれからも、この言葉を胸に現場へ向かう。あの日、職人たちが泥にまみれ繋いだ黄瀬川大橋のバトンを、今は新たな技術という武器を手に、さらなる安全と高品質な施工で未来へと繋いでいく。「人の手と確かな技術で、人の暮らしを守る」。その誇りと情熱を燃やし、かつての私が職人たちの背中に魅せられたように、私たちの技術と誇りがそんな魅力あふれる建設産業の姿として結実していることを願い、私は今日も地元静岡の地に立ち続ける。



## 不動産・建設経済局長賞

# 2050年、 社会インフラを守るのは

かり や まさゆき

狩屋 雅之〔岡山県立岡山工業高等学校 / 岡山県〕



「先生、ここ、ひび割れが進んでいます。」

それは真夏の道路だった。照り返して熱を持ったアスファルトに、一人の生徒がしゃがみ込んでいる。指差した先には、細く伸びたひび割れがあった。その生徒は、かつて「土木は自分には向いていない」と話していた。しかし今、自分の目で道路を見、自分の言葉で異常を伝えようとしている。その姿を見た瞬間、私は確信した。

2050年、社会インフラを守るのは、いま私の目の前にいる高校生たちだ、と。

現在、日本の社会インフラは大きな転換期を迎えている。高度経済成長期に整備された道路や橋、トンネルなどは、いま急速に老朽化が進み、維持管理の重要性は年々高まっている。その一方で、建設産業では担い手不足が深刻化している。このままでは、地域の社会インフラを守り続けることは難しい。だからこそ、これまでにない新しい発想と、次世代を担う人材育成が必要だ。

私は、岡山工業高校土木科で教員として勤務している。教員になる前は、建設コンサルタントの技術者として道路維持管理に携わっていた。現場で実感したのは、社会インフラを最後に守るのは「人」だということだ。そして、将来この地域の社会インフラを誰が守るのかという問いが、いつも頭の中にあった。その問いこそが、私の教育実践の原点になっている。

本校では十年前から「岡山道路パトロール隊」を結成し、生徒たちが地域の道路を歩いて点検する活動を続けている。活動を始めた頃、あの生徒も道路を見ても何も気づかなかった。しかし、現場へ出るたびに変わっていった。「橋の排水溝が詰まると橋が傷みやすくなる。」「この段差は危険だ。」仲間と議論し、自分の目で道路を見るようになった。

そんなある日、地域の方が生徒たちに声をかけてくれた。「暑い中ありがとう。助かってるよ。」その時、あの生徒は照れながら私に言った。「先生、自分たちは地域を守る仕事をしているんですね。」その言葉を聞いた時、私は教育の力を感じた。生徒たちは、仕事の中で誰かの役に立ち、認められる経験を積み重ねている。

この活動は、産官学の連携によって成り立っている。国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所がフィールドを提供し、維持工事を担う舗装会社が技術面を支え、岡山県内土木科の高校生が主体となって点検を行う。活動開始当初、道路パトロール隊メンバーの建設業への入職率は約三割だった。しかし、生徒たちは現場で社会とのつながりを実感し、自分たちの仕事の意味を理解していった。活動二年目には八割、

三年目以降は全員が建設業へ進み、現在では土木科全体でも約九割の生徒が建設業界へ進んでいる。これは単なる数字ではない。現場で自分の役割を実感した経験が、生徒たちの未来を変えたのだ。

こうした取組は、社会からも高い評価を受けている。インフラメンテナンス大賞優秀賞を二度受賞し、天皇皇后両陛下に御拝謁の機会もいただいた。しかし、私が最も嬉しいのは、生徒たちが地域の中で誇りをもち始めたことだ。

さらに私たちは、AIやロボット技術にも挑戦している。岡山大学と連携し、五年間、AIを活用した保安姿見ミラーの開発や、ドローンを活用した河川巡視の効率化に取り組んできた。コンピュータが得意ではなかった生徒も、放課後に試行錯誤を重ねながらプログラムを書き続ける。「できました！」夜遅く、教室に響いたその声を、私は今も忘れることができない。

そして今、次の挑戦として四足歩行ロボットによる道路パトロールの実証実験を進めている。点群技術とAI、現場の知見を組み合わせ、ロボットが自律的に巡回し、異常を判断する仕組みである。生徒たちは目を輝かせながら計画書を作成し、企業や行政の方と打合せを重ねている。

ある生徒は笑いながら言った。「先生、ドラえもんの世界みたいですね。」その言葉に、私は建設産業の未来を感じた。この取組は高校からの提案を起点に広がり、十月には国道での公道実証実験を予定している。これは全国的にも珍しい取組であり、国土交通省や多くの企業の支援を受けながら進めている。

かつて「守られる側」だった高校生たちが、いま「地域を守る側」へ変わろうとしている。建設産業は今、大きく変化している。しかし、AIやロボットが進化しても、社会インフラを最後に守るのは「人」である。人の想いと技術、地域への責任感が、人々の暮らしと安全を守り続ける。

先日、あの生徒から連絡があった。「先生、いま自分は高速道路の床版取替工事を担当しています。」あの日、「土木は自分には向いていない」と話していた生徒が、いま人々の暮らしを守る仕事に誇りを持って取り組んでいる。

私は、真夏の道路で「先生、ここ、ひび割れが進んでいます。」と話していた、あの日の彼の姿を思い出した。あの小さなひび割れに気づいた高校生が、いま社会インフラを守る技術者になった。

2050年、社会インフラを守るのは、いま私の目の前にいる高校生たちだ。



優秀賞

# 土木系女子の経験を語る

かみむら ゆ の  
上村 結之 [瑞穂建設株式会社 / 群馬県]

私は土木施工管理の仕事をしている、というの大抵驚かれる。土木仕事イコール男性がするものというバイアスが存在しているからだろう。土木に携わるには力や持久力が必要で、男性よりも体力のない女性には向かないのではないかと考える人もいる。しかし、それはもう古い考えなのである。令和と呼ばれる今の時代は、“土木系女子”、いわゆる“ドボジョ”も活躍できる時代なのだ。誰でも輝ける舞台がこの業界にもある!ということを、あらゆる人に知ってほしい。

もちろん、甘い世界ではない。

私はまず作業員として働いた。初めて持つジョレンという道具。畑を耕すのではなく、新品でピカピカのヘルメットを被って碎石を均した。ランマーがあんなに重いなんて知らなかった。押せば勝手に進んでいくものではなく、体全体を使ってバランスをとり、前に進むためには全力で押していくしかなかった。女性ということを良く思わない人もいて、人間関係の壁にもぶつかった。何をしても「これだから女は」と文句を言われることもあった。

それでも、土木という仕事で輝きたかったのは父の影響が大きい。父は、私が生まれる前から自営業で土木会社を運営している。幼い時から父の背中を追いかけて、習い事を真似して柔道をしていた。当時は柔道も女子の人口が少なく、負けず嫌いな私は、「男社会で活躍して、父に認められたい」という想いを抱えていた。今でも負けず嫌いは健在で、「父よりも立派に、そして世間にも認められたい」という想いで“土木”という茨の道に足を踏み入れた。

社会人2年目からは土木施工管理の勉強をして資格を取り、監督として今の会社で働くこととなった。初めての測量、杭打ち、書類作成。現場で何種類もの機械の据え方を教わったり、3kgもある大ハンマーを振り回して丁張をかけたり、CADを使って図面を描いたり、様々な経験をさせてもらった。新鮮で、楽しく、そして辛く苦しい時もあった。そうして2年の月日が流れ、後輩ができ、今は現場代理人として仕事をしている。たとえ力及ばなくても、体力及ばなくても、私には私なりに違う活躍の仕方があると学んだ。一例を挙げると資格取得である。私は宅建(宅地建物取引士)、2級土木施工管理技士、そして1級土木施工管理技士補の資格を取得した。知識は大きな力となって私に自信を与えてくれた。また、他の人の見る目も変わっていった。上司からは「『現場のことなら私

に聞けば大丈夫!』と言えるように勉強していけば、一緒に働く人も安心して作業できるようになるよ」とアドバイスをもらい、日々精進している。

自分自身の施工管理体験以外にも、「誰でも輝ける舞台がこの業界にもある!」という主張を裏付ける理由が三点ある。第一に育児休業や時短勤務などの柔軟な働き方の整備、第二に女性向けの作業着やヘルメット、安全靴の開発、現場での安全性や快適性の向上、第三に女性技術者の加点制度など、様々な改革が成されていることはご存じだろうか。

男性向け社会とされていた建設業では、今の時代、多くの企業が産前・産後休業や育児休業の制度を整備し、復職後も時短勤務やフレックスタイム制を活用できるようにするなど、ライフステージに応じた柔軟な働き方を支援している。こうした取り組みにより、土木業界では従来の「男性中心」のイメージを変え、女性技術者が安心してキャリアを築ける職場づくりが進んでおり、長期的な人材確保や現場の多様性向上にも繋がっている。実際私の会社では、女性社員だけではなく男性社員も育児休暇をとれるような制度を導入し、実際に利用されている。

また、現場で必須となる作業着やヘルメット、安全靴も、女性用サイズの普及、女性専用のトイレや更衣室の充実が進んできている。これは女性が活躍できる場へと業界が変化している証であり、女性が安心して働ける理由のひとつでもある。

さらに、土木業界では女性の活躍を促進するための点数制度として、女性技術者が主任技術者や現場代理人として配置された場合、工事成績審査において加点評価が行われることもある。

これらの取り組みが、建設産業全体の活性化を目指し、女性でも活躍しやすい社会を育んできたのである。

上記の取り組みは主として女性に視点を当てているが、今もなお変化し続けている建設産業の働き方は、女性だけでなくあらゆる人々に活躍するチャンスを与えてくれるだろうと信じている。これからも私たちが働く見本となることで、業界の大きなイメージアップに貢献し、誰もが輝ける舞台づくりをしていきたい。そして、胸を張って「私は土木施工管理技士なんだ、これまでたくさんのインフラ整備をしてきたんだよ」と言えるよう、真摯に仕事に打ち込んでいきたい。



優秀賞

# ハイヒールから安全靴へ

えんざき な な か  
圓崎 南々花 [長田組土木株式会社 / 山梨県]

「いらっしゃいませ～」綺麗なハイヒールに大好きな洋服を着てアパレルのスタッフとしてアルバイトをしていた学生生活。そんなキラキラしていた学生時代が終わり、早4年。気づいたら作業着を着て安全靴を履いて現場に立っていた。人生が180度変わったのだ。

はっきり言って、SNSで見る都会の生活を夢見ていた私は、土木分野には全く興味がなかった。しかし祖父母、父が土木関係の仕事をしていたので身近な存在ではあった。泥だらけで帰宅する父の姿を見て育ったのでどこか惹かれている部分はあったのかもしれない。父に勧められるがまま大学では土木科を専攻し橋や道路について学んだ。そして卒業後、現在の会社に就職した。

入社当時の土木に対するイメージは最悪だった。男社会に女一人。しかも現場作業。汚い。重労働。炎天下。おじさんたちによるバワハラ…。キラキラしていたアパレルスタッフとは真逆の生活を送ることになると覚悟していた。

しかしそんな私が、いざ入社すると色んなことにギャップを感じた。おじさんたちは気を遣ってなのか話しかけてこない。重いものは進んで運んでくれる。「女」だからという理由で現場では孤独だったのを覚えている。さらに現場で飛び交う言葉は大学で学んだ専門用語とは違い、全く理解できない。立場的に「どうすればいい?」と作業について聞かれることも多かったが最初のうちは何も答えられなかった。作業員さんをイライラさせてしまっていることも多く、自分が無力で辛かった。力仕事では男性にかなうわけもなく悔しかった。こんな私を見捨てず、付きっきりで指導してくれる上司にも申し訳なくて現場に行きたくない日もあった。でも現場は待ってくれない。くよくよしている暇はなかった。そんな時ふと大好きな祖父が「この道路は俺が作った。」と話してくれたのを思い出し、私もそんな言葉を言えるようになりたいと思い自分から積極的に作業員さんとコミュニケーションをとるようにした。挨拶をする、休憩時間も積極的に世間話に参加すること

に心がけた。現場の人の考えを聞き、現場の人が使う用語も覚えた。作業員さんとの会話からは、大学の授業では学べない危険箇所などの気づきも多くあり毎日毎日必死に食らいついた。いつしか辛いと思うことがなくなり現場に行くことに楽しさすら感じ始めた。

そして迎えた初めての現場の完成。みんなで作り上げた「橋台」。私が初めて関わった仕事「橋」という形として地図に残ったのだ。この橋を友人や家族など、多くの人々が利用し、何年、何十年と人々の生活を支えていくことになるのだろう。「土木」ってすごい。カッコいい。そんなことを考えながら実際に完成した橋台の竣工検査が無事に終わった時の感動は絶対に忘れない。忘れてはいけないし、忘れるはずがないと思った。

現場に出ていると、女性ということで体力的な面で無力に感じることもある。しかしそこには助けてくれる、支えてくれる上司がいて作業員さんがいる。そして女性にしか気づけない視点も多くある。例えば現場事務所の整理整頓、近隣住民への声掛け、現場周辺を歩行する子連れや妊婦さんなどへの安全配慮など女性ならではの視点で貢献できることはある。だから「土木」を女性だからという理由で遠い存在には感じないでほしい。「土木」は何十年先もこの世界に残るものを作り上げ人々の生活を支える仕事なのだ。これほどカッコいい仕事はない。

そんな仕事ができていることを誇りに思い現場に立ち続け丸3年が経った頃。現場代理人として担当した工事の銘板に初めて私の名前が刻まれた。それを父と見に行った時は厳格な父も褒めてくれた。たくさんお世話になった上司もお祝いしてくれた。とても嬉しかった。土木の道を進んでよかったと心から思えた瞬間だった。

そして今、いつのまにかアパレルスタッフだった頃の私より生き生きと現場に車を走らせる私がいた。ハイヒールを脱いで、作業着を着て、履きなれた安全靴を履き大好きな作業員さんがいる現場へ今日も向かう。



## 優秀賞

# 土木に<sup>なす</sup>泥む わたしからのラブレター

とりす ちえみ  
鳥巢 智恵美 [C-Lien/ 石川県]

一九八九年の夏。中学生だったわたしは、学校の遠足で福岡百道浜のアジア太平洋博覧会「よかトピア」を訪れた。もともと海だったその場所が埋め立てられ、未来の街がつくられていく—その事実を知った瞬間、胸の奥で何かが弾けた。

「これを、わたしもつくりたい」

土木と出会ったあの日から、建設業界に深く惹かれ、離れられなくなった。そうなることを「<sup>なす</sup>泥む」という。三十年以上経つ今もなお、わたしはずっと「土木に泥んで」いるのだ。

しかし、その道のりは決して平坦ではなかった。

土木を学ぶために工業高校への進学を希望したが、地元には男子校しかない。あえなく普通科高校へ進学し、「国立大学に現役合格」という家族との約束を果たすため、アルバイトで塾代を稼ぎながら勉強を続けた。

大学受験の面接試験では、「なぜ女性なのに土木なのか」と教授に失笑された。親戚からも「女が土木なんて」と反対された。

大学院へ進んだのち、卒業を控えた就職活動では、さらに厳しい現実を突きつけられた。就職氷河期の中、「女性の採用は控えている」「院卒は給料が高い」と敬遠され、チャンスすら与えられなかった。

それでも諦めきれなかった。土木に泥む気持ちは決して薄れることはなかった。

ようやく北九州市役所港湾局で現場監督職に就いたものの、現場では「こんな若い女が担当か、代われ」と面と向かって言われ、悔しい思いもした。

それでも、逃げたくはなかった。

毎日現場へ通い、挨拶を続け、わからないことを学び続けた。

そんなある日、ベテランのオペレーターがわたしに向かって言った。

「おまえ、ガッツあるのお。みんな、この姉ちゃんを困らせるな。助けてやれ」

その日を境に、現場の空気が変わった。

挨拶が返ってくるようになり、現場のことを教えてもらえるようになった。

孤独だった現場が、楽しい場所へ変わった瞬間だった。

「努力してくれる人は、必ずいる」

この経験は、今でもわたしを支えてくれている。

しかし三年後、人生の転機が訪れる。

石川県在住の相手との結婚だった。九州で働いていた私にとって、彼との結婚は、同時に退職を意味した。

「やっぱり女は辞める」

上司の言葉のトゲが胸に刺さったまま、わたしは石川県へ移り住んだ。

再就職を目指したが、「結婚したばかりの女性は採らない」と断られ続けた。

やがて土木の世界から離れ、育児をしながら教育の仕事に就いた。

それでも、「土木に戻りたい」という想いだけは消えなかった。

再び訪れた転機は、町内で始まった北陸新幹線工事だった。

「雇ってください」

元請会社へ頭を下げ、再び建設業の世界へ飛び込んだ。

ブランクは十五年。最初は伝票整理からの再スタートだったが、休憩時間に独学でCADを学び続けた。わたしの努力する姿を見てくれていた先輩に認められ、やがて施工図を任されるようになった。

四十歳を過ぎてからの再出発だった。実体験から、人は何歳からでも成長できると確信した。

その後、縁あって地元建設会社へ入社し、「建設DX支援室」の立ち上げに携わった。

点群、GNSS測量、BIM/CIM——次々に現れる新しい技術に向き合いながら、現場を支える方法を模索し続けた。

体力面やライフバランスを考えれば、現場常駐を続けることは難しい。

だからこそ、書類作成やCAD、ICT支援、地域交流活動などを通して、複数現場を横断的に支援する立場を築いていった。

少しずつ信頼を積み重ね、やがて社内すべての現場に関わる存在となった。

あるベテラン技術者から言われた。

「お前がいてくれてよかった」

その言葉を聞いたとき、わたしは心から思った。

自分の居場所は、自分でつくれる。

現在わたしは組織を離れ、個人として建設業界に関わっている。

土木現場コーディネーターとして、これまでの経験を活かしながら、「建設業に関わり続けられる人を増やすこと」を目標に活動している。

三十年以上を振り返ると、何度も「女性だから」という壁にぶつかってきた。

しかし今、強く思う。真の女性活躍とは、「女性活躍」という言葉そのものがなくなることだと。

子育てや介護、ライフイベントを経ても、誰もが自然に建設業へ戻ってこられる。年齢やブランクが障壁にならない。そんな業界にしていきたい。

今年、わたしは五十歳になった。

でも、自分にはまだ伸びしろがあると本気で思っている。

第何次かわからない成長期の真っ只中だ。

今のわたしは、自分のためだけではなく、建設業を支えようとする人を支える立場として、育成や環境改善に力を注いでいる。

それは、これまで育ててもらった建設業への恩返しでもあり、わたしにとって、土木に泥むということだ。

壁にぶつかっても、前に進めないときがあっても、それでも離れられない。

百道浜で感じたあの日衝撃は、三十年以上経った今も、わたしの中で流れ続けている。

これが、わたしから建設業へのラブレターだ。

みんなで一緒に、建設業に泥もう。



優秀賞

## 父の背中を追って

はらかなこ

原可奈子 [株式会社平成建設 / 愛知県]

父が亡くなってから半年が経つ。会社の倉庫に積まれた材木の匂いをかぐと、今でも父がそこに立っているような気がする。

もともと材木屋で働いていた父は、地域の人たちの「家を建てたい」という声に応えるうちに、やがて自ら小さな工務店を興した。最初は本当に小さな会社だった。父が材木を選び、母が事務所で電話を取り、家族総出で支えていた。

父が建てた家はどれも地域の人々の暮らしに寄り添った温かい家だった。父はよく

「建設は人生の基だ」

と言っていた。材木屋として木の性質を知り尽くし、工務店として現場を熟知していた父だからこそ、その言葉には重みがあった。

母もまた、家事や育児に追われながらも、抱えていた職人の世話もし、父の仕事を支えていた。夕食の席では、二人が今日の現場のことやお客様の事を楽しそうに、時には議論を交えて真剣に語り合っていた。そして私はその会話を聞きながら育った。

時代が進むにつれ、会社の仕事も変わっていった。地域の戸建て住宅を中心に建てていた小さな工務店は、公共住宅の修繕や改修工事を主に請け負うようになった。父は「時代が変われば、求められる仕事も変わる」とよく言っていた。変化を恐れず、地域に必要とされる仕事を続けること。それが父の信念だった。

そんな父が亡くなった時、私は初めて自分がどれほど父の背中を見て育ってきたのかを思い知った。葬儀の後、事務所に残された父のメモや図面を見つめると、父の表情や声が次々とよみがえった。図面を見つめる時の真剣な顔、行き詰まった時の頭を抱えている仕草、生前は気がつかなかった細かな表情が今になって鮮明に思い出される。

経営者としての50年の歳月はどれほどの苦悩があったことだろう。気がつけば私は父が残した会社を継ぐ決意をしていた。流れで父の手伝いをしていただけの建設業が、父の死をきっかけに私の中で大切なものへと変わっていった。

会社を継いだ私は、父が果たせなかった挑戦にも向き合うことになった。建設業界にもデジタル化の波が押し寄せ、図面管理、工程管理、見積り作成など、あらゆる

業務の効率化が求められている。私は会社のDX化を進めるべきだと考えた。

しかしこれが想像以上に大きな壁だった。新しいシステムに皆が快く取り組んでくれたが、ベテラン社員たちが最初は手間取っていることが見て取れた。最初からうまくいくはずもなく、何度も仕様変更して皆に迷惑をかけた。私は悔しさと不安で胸がいっぱいになり、何度も心が折れそうになった。

そんな中、私の背中を強く押したのは、やはり父の姿だった。父は高齢になっても、梯子を使って屋根に上がり、危険な高所作業を当たり前のようにこなしていた。私はいつも心配だった。

「こんな危ない仕事、父に続けさせたくない」「高齢の職人さんたちにも、もっと安全に働いてほしい」その思いが私を新しい挑戦へと向かわせた。

私はDX化の一環として、ドローンの導入を決めた。屋根点検や外壁調査をドローンで行えば、高齢の職人が危険な場所に上る必要がなくなる。そんな思いからだった。

しかし、ここでも私は苦悩した。皆現場で手一杯の中、新しい技術を取得するのは想像以上に大変だ。そこで私はまず自らが進んで学び、ドローンを操縦し、資格も取得した。そして、少しずつ新技術への理解を得ていった。

DX化が進むにつれ、会社の雰囲気も変わっていった。新しい挑戦への苦手意識が薄れ、チャレンジの土壤が育った。技術が次世代へと受け継がれていく。父が築いた会社が、新しい形で未来へつながっていくのを感じる瞬間だった。

父の葬儀の時、職人の一人がぼつりと言った。

「あの時、お父さんと屋根に上ったのが最後の仕事になったよ。これからは、もう無理して屋根に上らなくていいね。」

その言葉を聞いた瞬間、胸が熱くなった。その人は私が3歳の時から父の会社で働いてくれていた大切な職人だった。

父が生きていたら、今の会社を見て何と言うだろう。事務所には父の、いや、会長の席がそのままに残っている。写真の中の会長はいつも柔らかく微笑んでいる。私は、父と母が守ってきた想いを、次の時代へつなぐ役目を担っている。父の面影を胸に、これからも私はこの会社、建設業を守り育ててゆく。



優秀賞

# 匂いが呼び覚ます誇り

にし の はる き

西野 春樹 [朝日土木株式会社 / 三重県]

ダンプの荷台がゆっくりと持ち上がり、熱気が立ち上る。その瞬間、私の鼻腔をくすぐったのは、あの懐かしいアスファルト合材の独特な匂いだった。油と熱が混ざり合った、大なり小なり舗装をしたことのある人なら誰もが知っている、あの独特で強烈な匂い。しばらく別の現場にいた私の胸の奥で、その匂いを一呼吸吸い込んだ瞬間、眠っていた熱いものが一気に燃え上がった。「ああ、舗装屋に戻ってきたんだ」と、身体の芯から湧き上がるような喜びが突き上げてきた。

私は十八歳で建設業界に入ってから、現場一筋で生きてきた。右も左も分からず、ただ先輩たちの後ろを必死に追いかけていたあの頃、私の原点となったのが舗装工事だった。その後、経験を積む中で、土木、上下水道の工事も経験した。どの現場も社会に欠かせない重要でやりがいのある仕事だったし、それぞれの工種に特有の技術や誇りがあることを肌で学んだ。現場を巡り巡った私が、最終的に「もう一度ここで生きていこう」と強い決意を持って戻ってきた場所。それが、自分の原点であり、あの独特な合材の匂いが漂う舗装業界だった。

一度離れて他の分野を経験したからこそ、改めて気づかされた舗装工の魅力がある。それは「自分の仕事の成果が、人々の目に映る」という所です。舗装は工事が終わったその瞬間から、真っ黒でなめらかな、美しいアスファルトの「道」として、誰の目にも見える形でそこに残り続ける。昨日までガタガタだった道路が、自分たちの手によって見違えるような美しい一本の線へと生まれ変わる。自分が流した汗の成果が、そのまま街の新しい景色になる。この圧倒的な手応えと達成感は、やはり舗装ならではのものだ。

特に夏場の舗装現場は、命がけの戦いだ。近年絶え間なく続く猛暑は、容赦なく私たちの体力を奪っていく。体温を超えるような直射日光が照りつけ、アスファルトの照り返しが全身を襲う。それに加えて、私たちの目の前にあるのは、一五〇度を超えるアスファルト合材だ。今や建設現場の必須アイテムとなった空調服を膨らませ、ファンをフル稼働させて現場に臨むが、目の前にある合材の熱によって熱風へと変わり、空調服の中を駆け巡る熱い風と、容赦なく立ち上る合材の匂い。現場の体感温度はゆうに五十度を超える。作業服の内側は絞れるほどの汗で、舗装靴の底を通して足裏にまで合材の熱が伝わってくる。

これほど過酷な環境でありながら、舗装の現場には一瞬の隙も許されない。合材は生き物と同じで、時間が経てば刻一刻と冷めて固まってしまうからだ。この極限状態の時間との戦いの中で、フィニッシャー、バックホウをミリ単位で操るオペレーター、レーキを手になめらかな平坦を出していくレーキマン、仕上りを左右するローラーマン、そして全体の進行をコントロールする現場監督。全員が猛暑の中で声を掛け合い、互いの体調を気遣いながら、チームワークで動く。全員の呼吸が完璧に合わさった時、現場には言葉を超えた一体感が生まれる。十八歳の頃はただその勢いに圧倒されるばかりだったが、中堅と呼ばれる年齢になった今の私には、この過酷な環境下でミリ単位の仕上りを追求する先輩たちの技術の凄みが、若い頃よりも何倍も深く、リアルに理解できる。だからこそ、その職人技の境地に、もう一度この手で挑戦し、腕を極めたいと思いました。

さらに、職人が持つ「ミリ単位の勘」や手技の尊さを守りながら、グレーダーによる高精度な路盤整地や、フィニッシャーによる正確な敷き均しにおいて、「ICT」と共存していくことだ。私が考えるICTは職人の技を奪うものではなく、普段こなしていく現場や夏場の負担を減らし、高い品質を可能にする技術だと思う。これまでの変わらない職人魂と、進化を続ける最新技術の双方が手を取り合う現場を仲間と共に築いていくこと。それこそが、三十二歳の今の私に課せられた役割であり、私を育ててくれた舗装業界への、私なりの恩返しだと確信している。

舗装屋には他にはない最高のご褒美がある。それは、自分たちが携わり、汗水流して舗装した道を休日に走る楽しみだ。ハンドルを通して伝わってくる路面の感覚を確かめながら、「ここはいい感じやなあ」と胸を張る瞬間がある。その一方で、「ここはもっと手前から上げたらよかったなあ」と、走りながら次の現場への改善策を考えている。ただ綺麗にできたと満足するだけでなく、走るたびに新しい課題を見つけ、もっと腕を磨きたいとワクワクする。終わりのないこの世界、私にとっての最大の原動力であり、舗装工の本当の面白さなのだ。

紆余曲折を経て戻ってきたからこそ、私には舗装屋としての強い覚悟がある。あの独特な匂いを誇らしく身にまとい、これまでに得たすべての経験を一本の「道」に込めながら、私はこれからも誇りを持って走り続けていきたい。



## 優秀賞

# 歴史の町並みに、 未来の安心を届ける

はなだ みか  
花田 美香 [カナツ技建工業株式会社 / 島根県]

五月、テレビのニュースで、美保関が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されると知り、担当した現場のことが真先に浮かんだ。松江市民として、ドライブや初詣などで昔からよく行っていた馴染み深い場所だ。えびす様の総本宮で国の重要文化財でもある美保神社の静かな空気感や、あの古い港町の佇まいが好きだった。特に、歴史ある旅館や老舗の醤油屋が軒を連ねる青石畳通りは、晴れた日のからっとした表情も良いし、雨が降ったときにしっとりと濡れてつややかに青くなる姿もまた違った良さがあり、どちらも歴史を感じる風情のある、私にとってお気に入りの場所だった。

そんな思い入れのある場所の玄関口となる「美保関駐車場整備工事」の施工管理を担当できたことは、技術者として嬉しくやりのがかった。この工事は、観光客が多く訪れる時期の深刻な混雑を解消するため、駐車場を新設するものであった。完成した駐車場を多くの観光客が利用する姿を想像すると、あの冬、現場の仲間たちと知恵を絞り、工夫を重ねた日々が懐かしく思い出される。

実際の工事は課題との闘いだった。悪天候が懸念される冬期施工に加え、観光関係者の早期完成への強い期待から工程管理には一刻の猶予もない。さらに敷地からわずか四十センチの距離に民家が隣接する狭隘な環境でもあった。厳しい気候のもと、タイトな工程を消化しながら、目の前の住民の生活環境に徹底して気を配る施工管理が求められていた。

まず徹底したのは隣人の日常を守る対策だ。当初、既存構造物の取壊しには大きな音と振動が出るブレーカーを使用する予定だったが、隣家への影響を考慮して発注者と協議し、振動が出ない圧砕機へ変更した。さらに、境界沿いに高さ約一・八メートルの仮設フェンスを設置してシート養生を徹底した。大切な暮らしを脅かさないための対策を講じ、現場を動かし始めた。

十二月、美保神社の伝統行事「諸手船神事」の日を迎えた。当日は行事の運営と参拝客の安全を最優先とし工事を一時休止した。資材を片付け、臨時駐車スペースとして一般に開放したのだ。自らは交通誘導員として現場に立ち安全確保に奔走すると、地元の方々から「お疲れ様。ありがとう。」と声をかけられた。それ以降も気さくに声をかけられる機会が増え、築かれた確かな信頼関係が、冬の現場を動かす原動力となった。

信頼関係が築けたからこそ、図面通りに終わらせるだけでなく、もっとこの町のためにこだわり抜きたいと考えた。特に歩道部分の舗装工は、近隣対策、景観、安全性を両立させる

ため、設計協議に熱を入れた。検討段階の型押し模様付きのカラー舗装は、施工時の振動が隣家に響く懸念があった。また、ここには神前結婚式の前撮りなどでハイヒール姿の参拝客も訪れる。現場で実際に前撮りに来た女性から声をかけられた際、その足元を見た瞬間、検討中の工法が孕む危険性にハッとした。路面に深い格子状の溝ができると、ヒールの先が隙間に嵌まってバランスを崩したり、お年寄りや子供がわずかな凹凸につまずいてつまずいたりする危険が生じると気づいたからだ。

そこで協議を重ね、振動がなく表面が滑らかで歩きやすい樹脂系薄層カラー舗装を選定した。同工法の中でも、島根県内初の実績となる特定の仕様を提案し、採用された。さらに、新設するフェンスや階段の手すりなどの金物類も、美保神社境内の構造物に使われている伝統的な色彩と同色に統一し、厳かな景観に溶け込ませることにこだわった。多様なサンプルを取り寄せ、色合わせを重ねた。

また、新設する階段付近に夜間の照明計画がないことにも気がついた。周辺に街灯はあるものの、階段の足元までは光が届かず、夜間は死角となって段差が見えにくくなる恐れがあった。夜間や早朝の参拝客が足元を踏み外す危険を防ぐため、階段箇所へのソーラー式照明の設置を追加提案した。現場は吹きさらしの海岸線で、条件に合う塩害仕様の既製品がなかったため、選定した器具に独自で塩害対策の塗装を施して設置した。図面にはないからと見過ごさず、未来の安全までを自らの手で形にする。それこそが施工管理の本当の役目だと思った。

冬の厳しい悪天候を乗り越え、現場は負傷者を出すことなく無災害で無事に竣工を迎えた。完成した駐車場に最初の車が停まり、楽しそうに歩く家族連れの姿を見たとき、すべての苦労が充実が変わった。後日、地域の方から「これで安心して観光客を迎えられる、ありがとう。」と感謝の言葉をいただいた。

建設産業の仕事とは、単に図面通りの構造物を作るだけではない。その土地の歴史を敬い、そこに生きる人の日常を守り、未来に訪れる人々の安心を仕掛けること。それこそがこの仕事の本当の面白さであり、私の仕事への想いのすべてである。私たちが灯したあの明かりが、これから人々の素晴らしい旅の始まりを、静かに照らし続けることを願っている。

# 建設産業人材確保・育成推進協議会

## 令和8年度 高校生の作文コンクール

### ■ 趣 旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、将来の進路として建設産業を考えている高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象に、建設業への思いや建設業を進路に考えるようになったきっかけなどを広く伝えていただく場として、作文コンクールを実施し入選作品による作品集を多くの方々に届けています。

「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で14回目となりました。

### ■ 募集概要

- 応募資格 高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒
- 応募期間 令和8年5月11日(月)～6月30日(火)
- 応募テーマ 建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。  
私たちの暮らしを支える建設産業の仕事 又は 学びの中から見えてきた建設産業のかたち
- 応募総数 881作品

### ■ 作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

<https://kikan.kensetsu-kikin.or.jp/sakubun/result.html>

### ■ 選考委員

- 浦 江 真 人 東洋大学 教授  
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
- 寺 前 大 国土交通省 不動産・建設経済局 建設振興課長
- 岩 野 剛 (一社)全国建設業協会 業務執行理事
- 樋 脇 毅 (公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
- 小 島 哲 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事



## 国土交通大臣賞

# 国境を越えて子供たちの 未来を守る建築産業

かわかみ こなつ  
川上 小夏 [長崎県立長崎工業高等学校 建築科 2年]



建築科に入学して1年が経った頃、私はある変化に気がついた。車窓から通り過ぎる家々を眺めるとき、無意識に屋根の造りや外観を迫りかけている自分に気づいたのだ。1年前、まだ何も知らなかった私は、建築の良さや楽しさが正直分からずにいた。しかし、構造の授業で木造建築の仕組みを学び、設計の授業で部材にかかる力を計算するうちに、目に見えない設計が「安心できる生活」に直結しているのだと肌で実感した。専門知識が増えるたび、今まで見えていなかった世界が見えるようになり、普段の生活がパッと明るく、楽しくなっていく。街を歩いていると工事現場を見つけることがある。以前の私は何気なく通り過ぎていたが、今では思わず足を止めて見てしまう。ある日も、気が付けば工事現場の写真を二枚、三枚撮っていた。どのような工程で建物が造られているのか、どのような技術が使われているのかが気になって仕方がなかったのだ。建築を学び始めたことで、身近な風景の見え方が変わり、自分の世界が大きく広がったと感じている。

そんな高揚感の中に、私のブレない夢の原点がある。小学校5年生の時、私は『マザー・テレサ』の本に出合った。スラム街の貧困や紛争の中で生活する人々に寄り添い、愛を注いだ一人の修道女の実話だ。当時の私は、私たちが当たり前のように暮らす「家」や、学校、病院がない世界があることに強い衝撃を受けた。そして、「世界中の子供たちが貧困や戦争に苦しまず、安心して生活できる環境を作りたい」という強い願いを抱いた。その一途な思いを胸に、私は建築科へ入学したのだ。

2年生になった今、施工や計画など学ぶことはさらに増えている。建築が楽しくなる一方で、世界を見渡せば、今なお世界人口の7人に1人、約11億人もの人々が貧困に苦しんでいる現実と直面する。彼らには安心して眠れる家も、未来を築く学校や病院もない。その事実を知った時、胸が締め付けられるような悲しみと同時に、「私の学ぶ建築で、彼らの力になりたい」という強い使命感が込み上げた。言語も文化も異なる異国の地で働き、生活することは決して簡単ではないだろう。それでも、日本では災害を経験する中で多くの建築技術者がより安全な生活を営むための建物を造る技術を発達させてきた。人々の命を守るために積み重ねられてきた技術や知恵は、世界のさまざまな地域でも役立てることができると考えている。日本が誇る高い耐震性などの「安全性」や、空間を自由に変化させられる「柔軟性」は、海外の貧困地域にこそ必要とされる強みであるはずだ。日本の建築の素晴らしさを世界へ届け、子供たちの命と未来を守る環境を築くこと。それこそが、世界平和へと大きくつながる道だと私は信じている。

建築は、人が一生を生き抜くためになくてはならないものだ。だからこそ、戦争や紛争で建物が破壊されるような不条理は、絶対に許されてはならない。いつか世界中の子供たちに「当たり前の安心」を届けるために。私は今、目の前にあるすべての授業や課題に真剣に向き合い、夢を現実にするための確かな知識と技術を身につけていく。



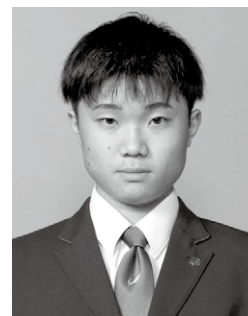


国土交通大臣賞

## 私を築く建設業

しげた ぜんと

茂田 禅将 [熊本県立翔陽高等学校 総合学科 工業系列建築 3年]



幼い頃、私はよくダンボールで家を作って遊んでいた。屋根をつけ、窓を切り抜き、自分だけの小さな空間を作り上げる時間が好きだった。「将来は本物の家を建てる人になりたい」と、その頃から漠然と思い描いていた。

そんな夢を持っていた私の世界を、一夜にして変えた出来事があった。2016年の熊本地震だ。地震が起きた夜、激しい揺れとともに近所の建物が崩れ落ちる音が聞こえた。翌朝、外に出た私が見たのは、見慣れた街の姿ではなかった。道路には亀裂が走り、家屋は傾き、昨日まで当たり前そこにあったものが一夜にして姿を消していた。安心して帰る場所が失われるということが、こんなにも人を不安にさせるのだと、子どもながらに胸が痛くなった。

それから数日が経ち、街のあちこちで復旧工事が始まった。その中に、母の知り合いで私も顔なじみの作業員の方がいた。子どもの頃からよく気にかけてくれていたその方が、現場の脇を通りかかった私に声をかけてくれた。いろいろ会話する中で、こんな言葉をくれた。「俺たちの作業が注目されることは少ないかもしれない。でも、俺たちがいることで、またみんなが安心できる家ができ、命を守ることができる。だから頑張れるんだ。」いつも穏やかに笑っていたその方の目が、そのときは真剣な光を帯びていた。

その言葉が、私の胸に深く刺さった。注目されなくてもいい。誰かの命と暮らしを守るために、黙々と手を動かし続ける。知っている人の口から出たその言葉は、本物の重さで私の中に響いた。その夜、私は初めて自分の将来をはっきりと思い描いた。建設業に就く、と。

高校で建築を学び始めると、この産業の奥深さと厳しさを同時に知ることになった。構造学では、建物一棟を支えるために無数の計算と判断が積み重なっていることを学んだ。木造・鉄骨・RC造それぞれの工法が、気候や用途、コストによって使い分けられることも知った。実習で初めて墨付けに挑んだとき、わずかなズレが構造全体の狂いにつながると知り、手が震えた。やり直すこと三度、ようやく一本の線が正確に引けたとき、先人たちが長い年月をかけて築いてきた技術の重みを、全身で感じた。また、建設業の就業者数がピーク時の685万人から約200万人も減少し、29歳以下の若者がわずか1割程度しかないという現実にも向き合った。あの方が命がけで守ろうとしていたものを受け取る人間が、今この産業には圧倒的に足りていない。その事実が、私の背中をさらに強く押した。

ダンボールで夢を描いた子どもが、今度は本物の家を建てる番だ。建築士の資格を取得し、設計と現場の両方を知る職人として、熊本の人々が安心して暮らせる街づくりに貢献したい。震災で傷ついたこの街を、次の世代が誇れる街へと変えていくことが、私の目指す姿だ。あの方が私に言葉をくれたように、私もいつか誰かの背中を押せる人間になりたい。注目されなくていい。誰もが安心して眠れる熊本の街をつくるために、私はこれからも学び続ける。





## 不動産・建設経済局長賞

# 一人ひとりの中にある建築

やまざき えい こ  
山崎 瑛子〔静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年〕



朝、午前6時半、私は家を出る。今はもうこの時間は明るい、冬は真っ暗だ。片道1時間45分、往復3時間半の登下校。これが私の日常だ。別の高校に進学した地元の友人からは、「なんでそんな遠くの工業高校まで行くの?」と呆れられることもある。しかし、私にとってこの3時間半のバス、電車、バスと乗り換える車窓の景色は、夢へ続く滑走路のようなものだ。そこまでしてでも学ぶ価値が、建築にはある。そして、この学舎で同じ熱量を持った仲間と出会えたことが、私の人生を大きく動かしている。

幼い頃の私はLEGOブロックで小さな家を作ることに熱中していた。家にあるLEGOブロックの種類や数は限られていても、出来上がる建物は毎回全然違う。実際に外を歩けば、限られた種類の材料を組み合わせさせて建てられた多種多様な建築物が目に入る。そこから私は建築に強い魅力を感じ始めた。建設産業に携わりたいという夢を持ったものの、自宅の近くには建築を学べる学校がないことを知り、大学から建築を学ぼうと思っていた。しかし、中学3年生の夏休みに、担任の先生から工業高校の建築科を紹介してもらったのをきっかけに、建築を早く学びたいという自分の気持ちに気付いた。そこから、両親と話し合いを重ねて、工業高校を受験することを決めた。

高校に入学し、建築研究部でコンペに没頭する中で、私はある衝撃を受けた。提示されたテーマは全員同じ。同じ教室で、同じ先生から、同じ知識を学んでいるはずなのに、出来上がった部員の作品は、私のものとは似ても似つかない、全く異なる輝きを放っていたのだ。「悔しい」と同時に、胸が震えた。なぜ、これほどまでに違うのか。それは、テーマへの解釈だけでなく、その人がそれまで生きてきた人生経験、境遇、建築に魅了された理由など、「一人ひとりの生き方」そのものが空間に溢れ出ているからだ。

これは設計図の中だけの話ではない。現場見学やインターンシップで実際に建設現場へ足を運ぶと、そこには頑固なまでのこだわりや、譲れない信念を持った職人さんたちがたくさんいた。誰が作るかによって、建築の温度は変わる。誰が携わるかによって、建設産業の可能性はどこまでも広がっていく。幼い頃、限られたLEGOブロックから無限の形を生み出せることにワクワクしたあの感覚の正体は、これだったのだ。

私は将来、現場監督として建設産業に携わりたい。現場監督の仕事とは、ただ図面通りに建物を建てることではない。それぞれの中にある「建築への強い想い」を持った職人たちを束ね、一つの巨大な芸術を創り上げることだ。十人十色のこだわりがぶつかり合い、響き合う。それこそが、私が目指したいこれからの「建設産業のかたち」だ。私にしか作れない現場がある。私だからこそ引き出せる、職人たちの形がある。その自分だけのかたちを見つけるために、私は今日も、仲間たちと刺激し合いながら、長い通学路の先にある大好きな学舎へ向かう。





## 不動産・建設経済局長賞

# 父の仕事と私が学ぶ理由

たか せ かん な  
高瀬 柑南 [静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科 1年]



朝起きて部屋の電気をつける。スマートフォンの充電器をコンセントに挿す。そんな、私たちが毎日何気なく繰り返しているこの行動の裏には、実は私たちの暮らしを24時間支え続けてくれている人々がいる。

私の父は電気工事士という仕事をしている。私は科学技術について学んでいく中で、建物の建築に関わる人達のすごさやカッコよさに最近気付かされた。私の父は現在、建築産業の一翼を担い、新しく建てられる家やビルに電線を引き、建築物に新たな命を吹き込む仕事をしている。父はいつも朝早くから仕事に出かけ、夜遅くに帰ってくる。父の作業着はいつも少し汚れていて、腰には重そうな工具を何個もつけている。私は、そんな毎日人のために働いている父を見て、暮らしを支える科学技術を、そして、その中でもとりわけ建築を学びたいと思った。

私は現在、科学技術高校の建築デザイン科で勉強に励んでいる。学校では、建築のデザインや構造、線一本一本を引くことの重みを学ぶ日々を過ごしている。図面を書く難しさに頭を抱えるようになって、私は父がいつも仕事をしているパソコンの画面を思い出した。そこには、私が学校で習う建築の図面の上に、さらに細かく複雑な電気の配線図が重なるように描かれていたのを覚えている。壁の裏や天井の中に、どれほどの長さの電線が通り、それがどう繋がっているのか。父はその複雑な線を読み解き、実際に現場で形にしているのだ。高校で専門知識を学び始めたからこそ、父がどれほど高度で、責任のあるプロの仕事をしているのかが心から理解できるようになってきた。

建築デザイン科の授業では、頑丈な柱や美しい壁の作り方などを習う。しかし、どんなに優れたデザインのビルや、大地震に耐えられる頑丈な家を建てたとしても、そこに電気や水が通っていなければ、それはただの「コンクリートの箱」に過ぎない。父のような設備に携わる職人が、壁の裏に血管のように配線を巡らせることで、建物に初めて「命」が吹き込まれる。照明が灯り、エアコンが動き、パソコンが使えるようになって初めて、建物は人々が安心して過ごせる「生きた空間」になるのだ。建築産業とは、デザインする人、骨組みを造る人、そして命を吹き込む人が、それぞれの専門技術というバトンを繋いでいくチームプレーなのだと強く実感した。

私たちの生活の土台である建築産業は、多くの職人のこだわりと、目に見えない努力によって支えられている。父が毎日、誰かの「当たり前の日常」を守るために現場へ向かう姿は、技術者を目指す私にとって今では大きな目標だ。

私は建築科で建築のデザインや構造、その素晴らしさを学び、将来は誰もが快適に暮らせる空間をつくる仕事に就きたい。そしていつか、父が命を吹き込みたくなるような、素晴らしい建物の図面を引いてみせる。それが、父の背中を追いかけて科学技術高校へ進んだ、私の大きな夢だ。そのためにももっともっと勉強に励んでいきたいと思う。





## 不動産・建設経済局長賞

# 重機に負けないパワフルな人

ごとうだ ひかり  
後藤田 光 [愛媛県立松山工業高等学校 土木科 3年]



建設産業に従事する人たちはパワーがあるように感じます。もちろん、体力的なパワーも多いですが、私が思うパワーのある人は、心が強く活気のある雰囲気はどこことなく溢れている印象でした。こう感じるようになったきっかけは、学校の授業で4日間、建設会社でインターンシップに参加して、事業所の方と建設業や土木業界について語ったことから始まります。

私がこう感じるきっかけになった人の1人目、同じ高校を卒業した先輩にあたる人で、卒業後から働いて2年目になる先輩。先輩は移動の際、一緒に車に乗ることが多く、そこで建設業や土木について語ってくれました。「将来はどうしたいか?」、「土木の楽しい瞬間、やりがいや大変なこと」など、いろいろなことを話しましたが、そこで先輩がボディーシートをくれる際に言っていた何気ない一言が、私はとても印象に残りました。「働いて汗をかいている人の匂いは嫌いじゃない。」たったこの一言。でもこの言葉には、建設業に対する誇りや先輩自身の経験や思い、そして建設業に従事する同業者へのリスペクトがこもったとても重みがある言葉だと私は感じました。従事して2年で達観したこの重みのある言葉を言える先輩を見て、この業界は人を変えてしまうほど、すごくポテンシャルを秘めているのではないかと私は感じました。正直私自身、3年間工業高校生として学んできましたが、土木に対する思いはあまり深くないです。それでも私は先輩に、「なんで土木来たの?」と聞かれた際に、ウケを狙って「この地元は俺が守るんだ」と豪語しました。その時はお互いに笑っていて、先輩も「いいじゃん」と言ってくれましたが、もしかしたら先輩は心の奥底で、ちゃんと肯定してくれていたのかもしれない。今はまだ、言葉の裏に隠された真意は読み取れませんが、いつかこの業界で従事した時には、真意が分かるように先輩みたいになりたいと私は思いました。

続いてパワーを感じた2人目は、その会社でPCやドローンといったICTを中心に任されている人でした。その人はとても温厚で、一見パワーとは無縁と思われるかもしれませんが、とにかく知識が豊富で頼りがいあるパワーを感じました。特にパワーを感じたポイントは、たくさんの資格が入った資格入れを見せてくれた時でした。なんでここにパワー?と思われるかもしれませんが、しかし、大量の資格と豊富な知識こそがあの人の土木に対する思いの具現ではないのかと、私は感じました。資格は一つ取るだけでも結構な労力がかかります。まして仕事をしている中、資格取得というのはなかなか厳しいと思います。それでもあの量の資格を持っているのは、その人のパワーがあるからこそできたことだと私は思います。

私はこの4日間で、他にもいろいろなことを知りました。ただし、どうしてその人が信念と誇りをもって取り組んでいるのか、建設業界がどのように人を変えていくのかなど、まだ完全には分からないことがあります。だからこそ、私も将来、建設産業の一員になり、人も産業もどう変わるのか身を投じたいと思いました。





優秀賞

## 未来への道のり

はやし おうすけ

林 旺佑 [栃木県立宇都宮工業高等学校 建築デザイン科 2年]

宇都宮工業高校の建築科で建築の基礎や技術を学ぶ中で、私は建築という職業が建物を建てるだけの仕事ではないということに気づかされました。建築とは、人々の暮らしを造り、地域の文化や歴史の証を未来へとつなぐ仕事だと思います。この学びの過程で、私の建設産業に対する印象は大きく変わりました。

その本質を強く意識するきっかけとなった出来事があります。それが、沖縄県で行われた首里城の復興プロジェクトです。2019年の火災によって正殿などが消失した首里城の復興は、沖縄によく訪れる私にとって、大きな衝撃でした。その再建の過程を知るにつれ、建設産業が持つ情熱と技術の継承という深い価値が見えました。首里城の再建は、最新の重機を使用すれば済むという単純なものではありません。そこには、宮大工などの職人たちの伝統的な木造軸組工法、失われかけた琉球独自の赤瓦を再現する技術、そして伝統儀式を大切に作る心など、何世代にもわたり受け継がれてきた職人の技能が必要不可欠だと感じました。

この姿は、私が学校の部活で鉋をかけ、継ぎ手や仕口を加工する意味と大きくつながっていると思います。私たちが学び、手を動かして身につけようとしている技術は、過去から現在、そして未来へと受け継がれ、将来の復興やものづくりを支える大きな力になります。建設産業の本質とは、効率性や経済性だけを追い求めるのではなく、首里城のような尊い技術や歴史を絶やさず、次世代へ受け継いでいくことにあると確信しました。また、首里城復興からはこれからの建設産業が目指す新しい視点も見えてきます。現代の復興現場では、伝統技術をただ再現するだけでなく、BIMやCADなどのデジタル技術を駆使したデータ管理や、耐震・防火性を高める現代の知恵などが使われています。つまり、これからの建設産業に求められるのは、伝統を守る強い意志と最先端技術を柔軟に取り入れる姿勢を両立させることです。

さらに、首里城の復興には、沖縄県民のみならず、全国から多くの人が関わり、寄付や応援の声を寄せています。これを目にしたとき、建設産業とは単に形ある構造物を造るだけでなく、人々の心の復興や地域の絆をつなげることを支える大切な仕事なのだと感じました。

人が集まり、誇りを持てる場所を創造することこそが、この産業の一番の目的だと思います。宇都宮工業高校で建築を学ぶ一員として、私はこの建設産業に携わる職人たちの、建物を完成させようとする情熱と社会的責任の重さに、感動と驚きを覚えました。

これからの建設産業は、担い手不足やICT化への対応など、大きな課題に直面していくと思います。首里城復興が示す技術への敬意と人々の思いに寄り添う心があれば、どんな困難も乗り越えていけるはずです。私は宇都宮工業高校で得る知識と技術を磨き、将来は形に残る建造物を通じて、人々の心に寄り添い、地域や文化を支え続ける建設産業の担い手として社会に貢献していきたいと考えています。





優秀賞

## 描くことと造ること

にしやま や や  
西山 椰々 [長野県長野工業高等学校 建築学科 1年]

私は絵を描くことが好きだ。特に、人の何気ない日常を描くことが好きだ。しかし、人物の仕草や表情を描くだけでは、その場の空気感を十分に表現できなかった。人が生きる背景には、必ずその人を包み込む空間がある。もっと空間や背景の表現を極め、自分の絵のレベルを上げたい。ただその一心で、私は建築学科のある高校への進学を決めた。

しかし、そこで私を待っていた建築の世界は想像以上に厳しいものだった。感性だけで自由に表現できる絵の世界とは違い、建築には安全性や使いやすさを支えるための正確な計算を行い、さらに材料の性質や構造、歴史など多くのことを学ばなければならなかった。絵なら紙の上ですぐに形にできるものも、建築として形にするには長い時間と多くの工程が必要だった。専門知識の細かさに圧倒され、自分の選んだ道の難しさに気後れする毎日だった。

しかし、学びを重ねるうちに、私は建築物を見る目が大きく変わっていった。今までただの「背景」として見過ごしていた街並みが、人の暮らしを支えるために考え抜かれた構造物として写るようになった。面倒だと思っていた計算や、細かな決まりにも、そこで暮らす人が安心して快適に過ごせるようにするための工夫が詰まっていたのだ。

例えば教室の窓。右利きの人が文字を書くときに、手元に影ができないよう、南側に窓が配置されるという工夫がある。しかし美術室では北側に窓が設置されていることが多いと知った。北側の光は強さや向きが安定しているため、デッサンに適しているからだ。私が絵を描くときに見ていた光にも、建築の工夫が関わっていたのである。建築はただ建物を造るだけでなく、その空間を使う人のことを考え、支えるために存在しているのだと感じた。また、一つの建物が完成するまでには、設計する人だけでなく、材料を作る人、施工する人、安全を守る人など、多くの人が関わっていることを知った。たくさんの人の知識や技術が積み重なることで、私たちが安心して暮らせる空間は作られているのだと思うようになった。

絵を描くことと建物を造ることは、形にする方法は違っていても根本にある想いは同じだと私は感じている。絵の中で人を生き生きと描くように、建築は実際の空間で人が幸せに生きる瞬間を支えている。

絵を描くためだけに飛び込んだ建築の世界だったが、今では建築そのものの奥深さに強く惹かれている。私も将来は建築デザイナーとして、人が安心して快適に暮らせる空間を作りたい。そして、私が建築に魅了されたように、その空間を通して、もっと多くの人に建築の魅力を感じてもらえるようにになりたい。建築の奥深さに魅了された今なら胸を張って言える。私は建築が大好きだ。





優秀賞

# 「当たり前」のために

おおたに あきふみ

大谷 晃史 [富山県立高岡工芸高等学校 建築科 2年]

私の父は、土木関係の配管工事の仕事をしています。一級土木施工管理技士の資格を持ち、今は会社の社長としての仕事もこなしながら地域の水道や排水の工事を支えています。そんな父の姿を見ていた。小さいときの私は、父の仕事があまり好きではなかった。夜、家で一緒に過ごしていると、突然電話が鳴る。「トイレの水が止まらないから来てほしい」そんな連絡が入ると、父はすぐに支度し、仕事へ向かった。休日でも同じだった。家族で出かける予定があっても、仕事が入ればそちらを優先する。そのたびに、父と遊べる時間は減っていった。友達の家庭のように、休日に一緒に出かけたり、遊んだりする時間があることが、うらやましく感じることもあった。私は一人っ子だったため、なおさらだった。当時の私は、なぜそこまでして仕事に行かなければならないのかが理解できなかった。

しかし、今では少しずつ考え方が変わってきた。建築の役割について学ぶ中で、父の仕事がどれほど人々の暮らしに欠かせないものなのかを知ったからだ。水道や配管は見る機会が少なく、意識されることが少ない。しかし、一度でも止まれば、生活はすぐに不便になる。トイレが使えない、水が出ない、そんな状況は日常を大きく乱す。父が夜でも現場に向かっていたのは、私たちにとっての「当たり前」を守るためだと気づいた。この仕事は決して目立つものではなく、大きな建築物のように形として残るわけでもなく、普段は意識されることも少ない。しかし、見えないところで確実に暮らしを支えている重要な仕事だと思うようになっていった。建設産業には、こうした目立たないが欠かせない仕事が多く存在している。基礎工事や設備工事など完成した後に見えなくなる部分ほど、私たちの生活の安全や充実に関する役割がある。だからこそ、これらの仕事がなければ、私たちの生活は成り立たないのだと感じた。

一方で、このような「当たり前」を守る仕事だからこそ、急な対応や長時間の労働を求められるという課題もあると感じている。父の姿を小さい時から見てきて、働く人の負担の大きさも実感してきた。生活を支える重要な仕事でありながら、その大変さが十分に知られていないという現状もあるのではないと思う。

私は将来、建築に携わる仕事に就きたいと考えている。その中で、人々の「当たり前」の暮らしを支えるという役割を大切にしながら、同時に働く人の負担を減らす方法も考えていきたい。例えば、設備の異常を早く発見できる仕組みや、効率よく管理できる技術が進んだとする。そうなれば、緊急の対応を減らすことにつながるかもしれない。かつては好きではなかった父の仕事も、今では社会にとって欠かせない仕事だと感じている。それと同時に誰かの生活を支える仕事に誇りをもって働く父を尊敬している。

建設産業とは、目に見える建物だけでなく、その裏で「当たり前」を守り続ける人々によって成り立っている。その一員として、よりよい環境と働き方を実現していくことが、これからの私の目標である。





優秀賞

# 思い出を守り、未来を築く建築

たけざわ かな  
竹澤 華那 [石川県立羽咋工業高等学校 建設・デザイン科 3年]

私の将来の夢は、建築士になることです。建築士になりたいと思った理由は、私が生まれ育った家が古い家だったことがきっかけです。昔から新しくきれいな家に憧れを持っていて、「こんな家に住んでみたい」と思うことがよくありました。そして、実際に新しい家に建て替えられたとき、家によって暮らしの快適さが大きく変わることを実感しました。その経験から、私も人々が安心して快適に暮らせる家をつくりたいと思い、建築士を目指すようになりました。

私は建築士を目指すため、大学や専門学校からではなく高校から建築について学び、いろいろな知識を身につけたいと思い、工業高校に入学しました。しかし、実際に学び始めると、構造設計や建築法規などの内容は想像していた以上に難しく、思うように理解できないことも多くありました。そのたびに、建築士になるという夢を諦めたいと思うことが何度もありました。それでも、ここで諦めたくないという気持ちで努力を続け、少しずつ知識や技術を身につけてきました。私はこれからも諦めずに粘り強く学び続け、将来は人々の暮らしを支えられるような建築士になりたいです。

私は能登に家があり、令和6年1月1日の能登半島地震を経験しました。能登半島地震によって、私たちの生活は大きく変わりました。地震の影響で私の家は被害を受け、そのままでは住み続けることができない状態になりました。それまで当たり前だった家での生活を突然失い、家族とともに避難所での生活を送ることになりました。避難所では、慣れない環境の中で多くの人と生活を共にし、日々を過ごしました。思うように休めないことなど、家があることのありがたさを改めて実感しました。また、崩れ落ちた建物や被害を受けた地域の様子を目の当たりにし、建物は雨風をしのぐためのものだけではなく、人々の命や安心できる暮らしを支える大切な存在であることを強く感じました。この経験を通して、災害に強い建物の重要性を深く考えるようになりました。地震が起きても被害を最小限に抑え、人々が安心して暮らし続けられる建物が増えれば、多くの人の不安や悲しみを減らすことができると思います。

私は、建築士になりたいという夢を実現させるために、高校卒業後は建築を専門的に学べる専門学校へ進学し、建築に関する知識や技術をさらに深め、将来は人々の暮らしを支える建築の設計に携わる仕事に就きたいです。そのために、残りの高校生活では、授業で学ぶ内容だけではなく、資格取得や課題研究などにも積極的に取り組み、より多くの建築の知識を身につけたいと思っています。また、新しいことにも積極的に挑戦し、自分自身を成長させていきたいです。

これから先、思い通りにいかないことや困難なことがたくさんあると思います。しかし、これまでの経験で培ってきた諦めない気持ちを大切に、どのような困難にも前向きに立ち向かいながら、自分の夢に向かって努力を続けていきたいと思っています。





優秀賞

# 私が建設にはまった瞬間

かわ べ けいすけ

川邊 恵佑 [岐阜県立中津川工業高等学校 建設工学科群 1年]

私の祖父は自動車関係の仕事をしており、幼い頃からよく車でドライブに連れて行ってくれました。祖父の運転する車に乗り、窓の外に広がる景色を眺める時間は、私にとって特別な思い出です。その中でも特に印象に残っているのが、建設現場で働く人や機械の姿でした。ホイルローダーやクレーン車が大きな音を立てながら動いている様子は迫力があり、幼い私の目にはとてもかっこよく映りました。

ある日私は、「おじいちゃん、この工事している人たちってかっこいいね」と話しかけました。すると祖父は、「この道路も誰かがつくってくれているんだよな。確にかっこいいなあ。おじいちゃんも、この整備した車を走らせることができるからかっこいいだろう」と笑顔で答えてくれました。その何気ない会話から、私は「働くことのかっこよさ」について初めて意識するようになりました。そして祖父は続けてこう話してくれました。「ものをつくるということは、自動車も建設も同じだ。でも建設は、道路や橋が形として残り、人の記憶や地図にも一生残る。とてもロマンのある仕事だ。」この「ロマン」という言葉を聞いた瞬間、私の胸は強く高鳴りました。ただかっこいいだけではなく、人の生活を支え、長く残り続ける仕事があるということに気づき、強く心を動かされたのです。私が建設にはまった瞬間でした。

それ以来、「自分も将来、トンネルや道路、橋をつくりたい」という思いが芽生えました。大人たちが大きな機械を使い、一つの大きなものを協力してつくりあげていく姿は、私の中で憧れとなり、その思いは次第に将来の夢へと変わっていきました。

中学校で建設業のインターンシップに参加したとき、その思いはさらに強くなりました。現場監督の方が「人の思い出となる建設をしよう!」と話された言葉が、祖父の言葉と重なり、建設の仕事には人の人生に関わる大きな価値があるのだと実感しました。この経験を通して、自分の夢は間違っていないと確信することができました。

現在、私は中津川工業高等学校で学びながら、建設に関する知識や技術を身につけています。建設の仕事は決して楽ではないと思いますが、自分が関わったものが形として残り、多くの人の生活を支えることができる点を学べば学ぶほどやりがいがある仕事だと感じています。祖父が教えてくれた「完成したときの達成感は何にも代えがたい」という言葉や、「人の役に立つ仕事をしなさい」という教えは、今も私の支えになっています。

これからはさらに学びを深め、自分の興味や関心を大切にしながら努力を続けていきたいと考えています。そして、祖父との思い出がつまった「道路」に関わる仕事に就き、多くの人に安心や喜びを届けられる技術者になることが私の目標です。また、自分が建設にはまった瞬間に知った魅力やロマンを伝え、次の世代が建設に夢中になるきっかけを作れる存在になりたいと思っています。





優秀賞

# 五十のダムの裏に見えたもの

お ぜ き は る ま  
小関 悠真 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年]

私の趣味はダム巡りである。そう周りに話すと、「なぜそんなものが好きなのか」とよく不思議そうな顔をされる。しかし、私にとってダムは単なるコンクリートの塊ではない。人の暮らしを静かに支え続ける、「ものづくり」の意味に気づかせてくれた確かな存在である。

きっかけはコロナ禍だった。外出機会が減る中で、親がダムに興味を持ち、山へ出掛けるのに付き合わされていた。そのうち家族全員でダムの沼へとハマっていった。山の静けさの中に突然現れる巨大な建造物。その圧倒的な迫力、存在感、そしてそこから放たれる水の低く重い音に私は強く魅了された。それ以来、「ダムに行く」と聞くだけで心が躍るようになり、気づけば自分から「ダムに行きたい」と口にするほどになっていた。時には車中泊をしながら、2日間でいくつものダムを巡ることもあった。そうして6年が経ち、静岡県内や近隣の県のダムを50基以上訪れた。

何度も足を運ぶ中で、ダムの見え方は変わっていった。初めてダム資料館に足を踏み入れた時、私はその背後にある歴史に目が向くようになっていた。ダム建設までの長い過程、そこに関わる多くの人々、時には犠牲や困難を伴いながら進められてきた歴史。ひとつのダムの裏側には、決して表には出ない、大きな物語があることを知った。なぜ、これほどまでに巨大で複雑なものを人は作るのだろうか。そう考えた時、私は初めて「建設」という営みの本当の意味に触れた気がした。

その後、私は工業高校に入学し、建築について専門的に学ぶようになった。インターンシップや現場見学を経験する中で、ある気づきを得た。それは、街の「建物」もまた、ダムと同じであるということだ。最初は違和感もあった。一般的にダムは「土木」、建物は「建築」と明確に分けられるからだ。しかし、学びを深めるうちに、その本質は同じであると感じるようになった。どちらも人の暮らしを支え、命を守るために造られるものであり、その背後には、多くの人の見えない苦勞、過程、努力が積み重なっている。

50以上ものダムを巡る中で知った、長い年月と多くの人々の関わり。それは建築の世界にも、そのまま通じている。建設には、分野の垣根を越えて、その裏側に共通する本質があるのだと確信した。つまり建設産業とは、単に形あるものを造るだけの仕事ではない。人の暮らしを支え、守り、未来へと繋ぐための「基盤」を築く営みである。ダムも建築も、その本質において違いはない。私はこの実体験と学びを胸に、将来は誰もが安心して暮らせる社会の基盤を支える一員になりたいと考えている。





優秀賞

# ペン先にかかる重み

さいとう こうし  
齋藤 光志 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 2年]

私が図面を引くペンには1トン以上の重みがある。これは、誇張でもなんでもない。自分が引く図面の線が持つ意味の重さに気づいたからだ。建築科に入学して二年目だが、図面上のわずかなズレが、そこに住む人の人生を左右し、時には取り返しのできない危険に繋がるという事実、大きな責任を感じるようになった。

一年前の私は、もっと気楽に建築について考えていた。ニュージーランドやオーストラリアで海外の建築現場を間近に見たときは、その自由なデザインや日本とは違う文化にただ感動し、「自分もこんな格好いい建物を創りたい」と、憧ればかりを膨らませていた。しかし、二年生になって設計コンペに挑戦したり、専門的な学習を重ねたりする中で、私の視点は「憧れ」から「作る側の覚悟」へと変わっていった。

きっかけは、住宅設計のコンペで自分にとっての理想の家を考えていたときのことだ。私は、地元である静岡の豊かな自然を活かした「農業と建築が溶け合う家」というコンセプトを大切にしている。しかし、いざ理想を形にしようとすると、手が止まってしまった。「もしこれが本当に建って、誰かが何十年も住み続けるとしたら、本当にこの間取りでいいのか?」という問いが、頭を離れなくなったのだ。

学校で学ぶことは、どれも責任に繋がっている。例えば、構造設計の計算。数字を一つ書き間違えるだけで、建物の強度は大きく変わってしまう。採光や設備の基準も、住む人の健康や快適さに直結している。さらに施工管理の勉強を通して、一度建てたものは簡単にやり直しができないことや、一つの建物を作るためにどれほど多くの職人さんが協力しているかも学んだ。

私が今、このペン先に感じているのは単なる重圧ではない。それは、住む人の命を守り、人生を支えるという建設産業の覚悟だ。そして、その確かな土台としての覚悟があるからこそ、私はその先に「大きな夢」を描くことができるだろう。

私の夢は、これまでの常識を塗り替える新しい住宅の形を日本から発信することだ。現代の住宅は、効率や利便性を追求するあまり、外の世界や自然、あるいは隣人との繋がりから切り離されてしまっているように感じる。そこで私は、住宅と農園が一体となった建築を提唱したい。家族と近隣の人々が共に土に触れ、野菜を育て、収穫の喜びを分かち合う。そんな、自然と人の交流が循環する社会を、建築の力で作り出したい。家をただ消費して過ごす箱ではなく、人とコミュニティが共に成長し続ける場所へとアップデートしたい。

もちろん、こうした理想を形にするためには、今の私が感じている重圧を乗り越える確かな技と知識が必要だ。一本の線を引くときの緊張感を忘れず、構造の安全や法規を徹底的に守り抜く。その当たり前の積み重ねがあった初めて、私の描く自由な夢は、誰かにとっての安心できる日常へと変わる。

私たちの暮らしを支える建設産業の本当の価値は、立派な建物を作ることだけでなく、住む人の一生を支える覚悟を形にすることにある。良い建築家を目指す上で、このペン先に感じる重みを大切にしながら、誰もが心から幸せを感じられるような、家建てられる建築家になりたい。





優秀賞

# 兄の背中が教えてくれた木の呼吸

さ さ き ゆうり  
佐々木 優吏 [静岡県立天竜高等学校 総合学科 建築系列 2年]

現場に漂う清々しい木の香りと、鉋をかける軽やかな音。私には中学生の頃から強く憧れている人がいる。それは、宮大工として歴史ある社寺の修復を行う兄だ。迷いなく木材と向き合い、一つ一つの木を見極めながら丁寧に作業を進める兄の姿は、ひたすらにかっこよく見えた。木に命を吹き込むように組み立てていくその姿は、まるで木と呼吸を合わせているようだった。兄から仕事の話を聞いたときに、その仕事の奥深さを知り、私も兄のように木と対話し、人々の暮らしを支える大工になりたいという夢を持つようになった。

その夢をかなえるため、私は天竜高校の建築系列に進学した。しかし、実習で初めて木材加工を経験すると、想像以上に難しいことばかりだった。ノコギリは思うように動かず、ほんの少しのズレで仕上がりが変わってしまう。木目も見ず、力任せにノコギリを引いた私は、思うように切ることができなかった。木は応えてくれなかったのだ。兄が当たり前のように行っていた仕事は、木への深い理解と、少しの妥協も許さない緻密な技術、すなわち「木と呼吸を合わせること」によって支えられていることを実感した。

実習で経験した一ミリ以下の精度の積み重ねが、実際の社会でどのような役割を果たしているのか。それを考えたとき、私はニュースで幾度も目にする地震や台風の被害を思い出した。私たちが毎日安心して暮らす家は、職人たちの正確な技術によって支えられている。特に日本の木造建築は、木が持つしなやかな強さを最大限に引き出すことで、自然の猛威に耐えてきた。普段は意識することは少ないが、一つ一つの丁寧な仕事と強い責任感が、自然災害から人々の命と「当たり前の日常」を守っているのだ。

だからこそ私は将来、木の温かみを活かしながら、どんな災害にも負けないしなやかで強い家をつくる大工になりたい。そのためには、受け継いできた技術や「木の呼吸」を読む力だけでなく、CADによる設計や最新の耐震技術など、現代の新しい知識も貪欲に学びたいと考えている。古い知恵と新しい技術を融合させ、安全で長く愛される建物をつくる。それが、私の目指す次世代の大工の姿だ。

夢を実現するためには、高校での学びをさらに深め、技術だけでなく、現場で仲間と協力する心や、建築に対する強い責任感も身につけたい。一つの建築物は、多くの人が力を合わせて初めて命を宿すのだ。そのことを忘れず、兄から学んだ「木の呼吸」を大切にしながら、伝統の技術と新しい技術を未来へつないでいきたい。そして、人々が安心して暮らせる建物をつくり、地域社会に貢献できる大工になることが私の目標である。





優秀賞

## 未来へ脈打つ建築

のぐち ひまり  
野口 向葵 [長崎県立長崎工業高等学校 建築科 3年]

私は、三年間この長崎工業高等学校で建築について学んできて、思ったことがある。それは、建築は人間の体に例えると「心臓」のような存在だということだ。なぜかという、心臓は全身に血液を送り、生きるために欠かせない役割を果たしている。同じように、建築も人々の暮らしや社会を支える重要な存在であるからだ。

私たちは、毎日家で生活し、学校で様々なことを学び、お店で買い物をし、体調を崩したときは病院で治療を受けている。しかし、その当たり前の日常は、建築があってこそ成り立っていると私は思っている。もし、家がなければ安心・安全に暮らすことはできず、学校がなければ学べる場所を失ってしまう。また、病院がなければ適切な治療を受けることも難しくなっているだろう。そんな、私たちが普段当たり前と思っていることの大半は、建築によって支えられている。

また、私は初め建築について単に建物をつくるだけだと思っていたが、実際は、建物をつくるだけでなく、人々の安全を守り、地域の発展を支え、この日本で多い災害から命を守るという大切な役割を担っていることを授業を通して知った。そのなかでも、地震や台風などの自然災害が多い日本では、丈夫で安全な建物をつくるのが求められている。建築に携わる人々は、たくさんの知識や技術を生かしながら、私たちが安心して暮らせる環境をつくっている。その努力があるからこそ、私たちは安全で安心な生活を送ることができている。

私が授業で建築について学び、考える中で、その重要性を改めて感じるようになった。今の生活のなかで建築はあまり目立たない存在かもしれない。しかし、人間が心臓の鼓動を意識せずに生活しているように、建築も普段は意識されていないだけで、社会を、世の中を動かし続けている。もし人間の心臓が止まれば人の命が危険にさらされるように、建築がなくなれば私たちの生活そのものが成り立たなくなってしまう。だからこそ私は、建築は社会の心臓であると思っている。

近年、建設業界では担い手不足や高齢化といった課題があるといわれている。しかし、多くの人に建築の魅力や重要性を知ってもらい、建設業界を今以上に盛り上げていきたいと私は思っている。建築は人々の生活を支え、社会を動かす心臓である。その鼓動を未来へとつなげていくことがこれからの私たちの役割だと考えている。

私は将来、施工管理という職業につき建築にかかわることで、人々の暮らしを支えていきたいと考えている。そして、多くの人に建築の魅力や重要性を知ってもらい、建設業界を今以上に盛り上げていきたい。建築は人々の生活を支え、社会を動かす心臓である。その鼓動を未来へとつなげていくことが、これからの役割だと思っている。





優秀賞

# 建設業界を担う一人になるために

ひらかわ こうき  
平川 煌基 [熊本県立熊本工業高等学校 建築科 2年]

平成二十八年四月、熊本で震度七の地震が発生しました。多くの建物が音を立てて倒壊し、多くの命が失われました。当時、小学校に入学したばかりだった私もこの地震を経験し、三日間の車中泊、そして約一か月もの休校を余儀なくされました。遠足を翌日に控えた夜が一瞬にして変わってしまったあの出来事は、十年が経過した今でも私の記憶に鮮明に残っています。特に大きな被害を受けた益城町には、私の祖父の家がありました。幸いにも祖父の家は損壊を免れましたが、周辺の道路は大きく裂け、見慣れた景色の変わりように、自然災害の圧倒的な恐ろしさと、日常が壊れてしまった現実を目の当たりにしました。しかし、その絶望的な状況から、私の心を動かす変化が始まりました。祖父の家を訪れるたびに、益城町の景色は少しずつ変わっていったのです。もともとは田畑や家が壊れ、まっさらになっていた土地に新しい住宅が建ち並び、道路は広く安全に整備され、町は震災前の姿に戻るだけでなく、以前よりも誰もが暮らしやすい町へと生まれ変わっていきました。この復興の速さと、人々の努力によって町がより良く変化していく姿に、私は衝撃を受けました。この復興を支え、地域の未来を創ったのは、多くの建設業に携わる方々の力です。この体験こそが、私が建築を学び、自らの手で社会を支えたいと思った最大の理由であり、建築科に入学するきっかけになった出来事です。

高校に進学した私は、建築科の授業の一環で建築基準法と耐震基準について学びました。そこで、建築には人の命を守るための厳格なルールがあり、地震をうけてどのように建物が倒壊してしまうのか、耐震基準ではどんな地震の対策がされているのかを学びました。そして、安全な構造物を造るために欠かせない法律であることを知りました。熊本地震で被害を受けた建物の中には、新耐震基準を満たしていない古い構造の建物が全壊している割合が高いことを知りました。しかし、どのような理由があっても、建物の倒壊によって命を失う人がいるという悲劇を、これから二度と繰り返してはなりません。人が安心して一生を暮らせる建物を造り続けることは、建設業界が最も大切にし、これからも追求し続けるべき使命であると考えます。

この使命を果たすための新たな一つとして、近年ではAIやロボットを活用して住宅を建設する技術が進歩しています。AIの進歩によって施工の効率化などが期待される一方、人の仕事が機械に置き換わる場面も増えています。しかし、現場における臨機応変な状況判断や、長年培われた職人の高度な技術、人間にしかできない領域は数多く存在します。これからの建設業はAIと人が競い合うのではなく、それぞれの強みを活かして共存する時代になると確信しています。そのためには、私たち人間が資格や知識、技術を身に付け、自分にしかできない能力を高め続けることが必要です。

この作文を書く中で、私は改めて建設業の大切さと建物の重要性を実感しました。そして、建築の道を選んだことは間違いではなかったと思います。将来は、災害によって建物の倒壊で命を落とす人を一人でも減らし、「建物が原因で亡くなる人をゼロにする」という目標に向かって頑張ります。そのために、まずは資格取得や専門知識の習得に励み、AIなどの新しい技術も積極的に道具として使いこなしながら、人にしかできない価値を発揮できる建設技術者として、豊かな社会の実現に貢献していきたいです。





優秀賞

# 社会の役に立ちたい

お だ わ ら あ や ね  
小田原 綾音 [鹿児島県立鹿屋農業高等学校 農林環境科 3年]

私が住んでいる地域は農業が盛んで、トラクタやトラックなどの農業用車両が頻繁に走る道路があります。その道路にはヒビや凸凹が見られる箇所も多く、歩行者が危険に感じる狭いところもあります。

私は高校生になるまで、道路はあって当たり前のものだと思っていました。しかし、今では多くの人の努力や関わりがあって作られていることを知りました。そのきっかけは、高校2年生のときに行われた校内での施工体験実習に参加したことです。数人の技術者の指導の下、バックホーでの床堀りに始まり、碎石敷均し、鉄筋組み立て、コンクリート打設と色々な作業を体験しました。発注者の仕事内容やコンクリートの品質検査、作業工程についても説明を聞き、普段の授業だけでは学ぶことのできない多くのことを理解することができました。作業の中にも細かなコツがあり、体力的なことを含め改めて大変な仕事だと感じました。

私の夢は土木の仕事に携わり、社会の役に立てる人になることです。そのために三つの目標があります。一つは生物や環境に与える影響を少なくして、誰にでも優しい道を作ることです。道路を作るときには土地の掘削や樹木の伐採が必要で、そこに住む生物の生育環境に影響を与えています。また、交通量の少ない地域でも交通事故のリスクを無くし、子どもや高齢者が安全に利用できるような、人にも生態系にもやさしいインフラ整備に携わりたいと考えています。次に土木の魅力を多くの人に伝え広めることです。土木は過酷な気象状況であっても毎日現場で作業をするための体力が必要で、時には命に関わるような事故と隣り合わせの危険なイメージがあります。しかし企業の説明を受けた際に、女性でも活躍できる場面は多くあり、今は建設業界に若い女性が増えつつあることを知りました。そして、働く環境もずいぶん改善されています。多くの現場ではICTを活用した施工が行われています。しかし、世の中の多くの人はこのことを知りません。私は日々変化しているこの業界の魅力を、多くの人に伝える手段をこれから考えていきます。三つ目に自分が携わった構造物が多くの人に利用され、豊かな生活に貢献することです。施工実習をとおして、ものづくりの大変さと完成したときの喜びや楽しさを味わうことができました。そして、友達からは「すごいね」「かっこいい」と声をかけてもらい、嬉しく誇らしい気持ちになったことが忘れられません。このことが、私が建設業界で働きたいと思うようになったきっかけでした。

昨年、笠野原台地に水を引いた時の話を聞く機会がありました。深く掘らないと水が出ない笠野原台地は、遠く離れた高隈山から飲水をひいたことで人口が増え、土地を開拓し、戦後にダムが建設されたことで豊かな農業地帯となった歴史がありました。土木の仕事は、そこに住む人々の生活に大きく影響し、地域の歴史に深く関わっています。私もそのような仕事に携われるように、信頼される土木技術者を目指していきます。



MEMO

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

